

TERRENCE PARKER in OSAKAを終えて 'yu'

7月3日金曜日に開催のTERRENCE PARKER in OSAKAについては、関係者各位、ご来場いただいた方や、当日来れずとも激励の言葉をくれた方、宣伝してくれた方、全ての方に改めてこの場で厚く御礼申し上げます。

この件について少し振り返らせてもらいたいのだが、あえてTERRENCE PARKERや、音楽的な部分についての記述については割愛させていただく。

敬愛するDJとの4年ぶりの巡り合わせ。前回と違い、オーガナイズ役として、根本的な段取りを自分で組み立てて進めていくところで、色々とうまくことが進まず、周囲に心配をかけることも多く、とにかく当日までが不安だった。

前はどこでも飛び出すフラ撒きの鉄砲玉役でよかったが、今回はそうはいかない。体も4年分老いて、なかなかフラ撒きも自分のイメージした3分の1もできなかったような感覚だ。とにかく時間と体力が不足した。いや、途中で気力もなくなり、息切れも何度もしたといっている。

ただ、やはりこういう中で現場に足を運ぶところでの出会いや、ちょっとしたひとつの言葉、もちろん鳴っている音のエネルギーから新たな自分の原動力が湧き起ることで気持ちを再び高めていった。結局、最終的には精神力だ。

4年前から構想していた信頼する2人のDJと共に自分がブースに立つ。どうTPを迎えるかいろいろ考えたが、基本的に自分の音を鳴らすことができた気がする。朝方のB2Bは2人に任せた。TPがブース下りた時に自分の気持ちも切れたので、あとで少し後悔しかけたが、あれでよかったと思う。盛り上がったしね。

パーティー中、朝方、この大阪のクラブシーンに長年にわたり密接に身を投じてこられた、ストリートの生き証人とも言える諸先輩方からも、この一夜について、「ここ何年のうちで」「久しぶりに」など、お褒めの言葉をかけていただき、うれしかった。

そう、あの時点で一旦燃え尽きた。そして、今、そんな中、collectiveが11周年だ。これまで、幸運にも、友に恵まれ、色々な声をかけてもらい、複数活動できる場があって、ここまで来た。しかし、今平成27年8月19日現在のプレイ予定、8月29日collectiveのみ。待ったところで特にオファーもないし、他のパーティー遊びに行っても、そんなに急に自分で面白そうなことやれそうな新しいアイデアも浮かばない。

ただ、これを機に、collectiveという原点に戻ってきた現状を考える。もう一度、自分を見つめなおす機会だ。この文を読んでくれている人は、collectiveの周年を祝いに来ている人。あと少し、初めて来てくれた人とかもいるだろう。その中で、さらに、僕のDJを面白がってくれる限られた人たちのために、いい内容のDJをしたい。そして、こうして人前でDJさせてもらえるのも、collectiveメンバーのおかげだ。感謝したい。

今後は、collectiveをやるのがパーティー。あとは、個人的にミックスを自宅で録ったり、世界にこっそり発信することもやっていたらと思う。当面は、こうした個人的な活動が基本になると思うが、また「来るべき日」のための自己研鑽になればいいかなと思っている。音楽研究など、元々自分のためにやっているのである。こうして、人に囲まれているのは、結果としての出会いの幸運だ。

名曲探訪 番外編 'kengo matsui'

collectiveは今回で11周年を迎えます。長い間、皆さんと一緒に暖かいパーティーを続けられることに大変感謝しています。いつもありがとうございます。私事ですが、今年の1月30日に長女が生まれました。以来この7ヶ月は家事育児が生活の大半になっており、音楽研究はしばし育休しています。そのため今回は連載の楽曲分析をお休みし、代わりに最近見たライブについて書くことにします。

8月18日にD'Angelo初の単独日本公演を見てきました。会場のZepp Tokyoはキャパ約2700。もちろん満員。6~7割が男性、20~40代位が多い印象。客入れBGMはJ Dilla。ライブは予定時刻から40分以上遅れてスタートしました。

バンドは11名で、想像よりずっと派手なステージング。過去のアルバムやRed Bull Music Academyのレクチャー動画から、物静かで幾分シャイなイメージを持っていましたが、ステージでは楽しそうに人懐こい笑顔を見せ、広いステージをせわしなく動き、客席に歌わせる、手拍子を求める、コール&レスポンス、マイクスタンドを倒しかけてコードを引っ張って戻す伝統的アクション、アンコールの"Untitled"ではイントロから歌い出すフリをして歌わず、イントロを何度もループさせるといふコミカルな焦らしで客を沸かせるなど、大御所のパフォーマンスでした。演奏はノンストップで、かなりファンクで、いくぶんロック寄りな印象を持ちました。

全体を通して、James BrownやPrince、Marvin Gayeなどのブラックレジェントを何度も想起させるような王道の印象でありながら、Chris DaveとPino Palladinoによるグルーブは現代的。中盤の"Really Love"ではD'AngeloのフルセットとともにChris Dave節のリズムが良く出ていてライブ中ベストトラックと感じました。

現在8月15日のSummer Sonic Osakaでのライブのフル音源がネットに出ています。ぜひ雰囲気を感じみてください。

<https://soundcloud.com/team-dangelo-japan/summer-sonic-osaka-8152015>

information

今回は11周年記念としてゲストDJにOZZYKIをfeature。彼のcollective出塁率の高さは誰もが認めるところですが、11年目にして初の四番バッター(歌謡曲棒)として登場します。長身の和製大砲がレフトスタンド上段にボールを運んでくれることでしょうか。バット投げも見逃すな。

<http://blog-collective.blogspot.jp/>

press collective

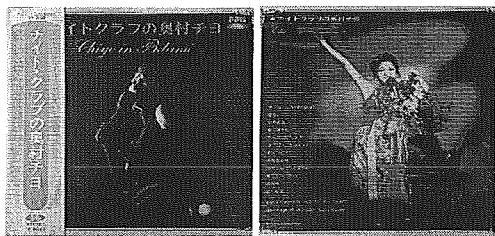
歌謡曲 生演奏音源の魅力 ‘OZZYKI’

こんにちは。今回ゲストDJで出演することになりましたOZZYKIです。機会をいただいたcollectiveメンバーには感謝しています(本当にね～、普段はアーカイブアー野郎なんですよ、僕。びよびよのDJですので、お手柔らかにお願いします)。紙面を借りて、自己紹介がてら音楽への思いを少し述べたいと思います。

今回の選曲は歌謡曲ですが元々僕は60年代～70年代洋楽やオルタナ系が好きで、バンドでギターやっていたような人でして、守備範囲が歌謡曲へ広がってきたのはここ7～8年前からです。のめり込んだきっかけはYouTubeの動画です(笑)。70年代の歌番組や歌謡祭の動画観て、バックバンドの演奏・編曲のクオリティに感動して、これはかっこいい、もっと掘り下げて聴きたいと思ったんですよ。ピンクレディーのライブ盤を聴くと歌唱も演奏も凄い。一曲目からファンキーでジャジーなインストの序曲が始まって、これCDの中間間違っていないか?って(笑)。編曲が前田憲男、バックが稲垣次郎&ソウルメディアで和ジャズの重鎮が何でアイドルのバックやっつんの?と思いますが、当時は各レコード会社にオーケストラ編成のバンドもいましたし、特に人気歌手のバックは凄い面子が多く、ジャズ畑出身のプレーヤーが参加していました。

アメリカで「ホテルカリフォルニア」(内気なバラード曲)が大ヒットしたのが1977年。同じ年、イギリスでは「アナーキー・インザ・UK」でパンクロックが台頭、それだけでも時空が捻れているのに、その年の日本ではフルオーケストラジャズバンドの生演奏をバックに歌うピンクレディーをTVで見ながら、子供からサラリーマンまで振付を真似して踊り狂っていたという。。当時“ジャパン・アズ・ナンバーワン”と、日本の工業力が賛美されたんですが、娯楽こそ最強じゃないですか?当時の日本は、「文化大国日本は凄いやんや、歌謡曲＝国益なんや」という持論の所以はここにあります(笑)。せっかくなんで推薦盤をご紹介します。「ナイトクラブの奥村チヨ」(TP-8053/東芝/1970年)を挙げさせていただきます。京都にあった大型ナイトクラブ「ベラミ」での奥村チヨのライブ盤で、バックは北野タダオ&アロージャズオーケストラ。独特のフェロモン系の歌いまわしを生音源で堪能できるのも醍醐味ですが、声の伸び・音量が本当に素晴らしく、バックのホーンセクションも絡んで、リサイタル盤ならではの生グルーブを楽しめます。特に民謡「木遣りくずし」のジャジーで軽快なアレンジはまさに和レア・グルーブ。ラスト2曲で、酔客にマイクを向けワンフレーズ歌わせるなど大変面白いです。

ある一定の評価や人気がある音源より、自分で面白い音源を掘り起こして新発見するのは楽しいですね。元々60年代音楽からはまったため、ストライクゾーンは広いです。DJやるなら、元々好きな音楽がチラッチラッと伺い知れるような、そんな選曲が理想ですね。今は技量的にそんな余裕はないのですが。和モノには陽の目をみない名曲がまだまだ埋もれています。機会があればまた面白い音源をご紹介しますと思います。



ボリュームコントロール ‘mackiart’

こんな経験ありませんか? お気に入りの曲を有名なDJがミックスしていたのに触発されて、自分も同じように繋いでみるのだけど、なぜか一緒に雰囲気にならない。私自身、昔から何度もこの経験をしていたのですが、つい最近この原因の一つを突き止めることができたのです。それが「ボリュームコントロール」。

ザックリ言うと音の上げ下げをすることなのですが、これを意識することで、ミックス時のバランスを整えることができます。さらに曲の音圧や音質を瞬時に聞き分けて、両方が上手に溶け合うようにするためにボリュームコントロールするだけでグルーブが生まれるのです。

方法はいたってシンプル。まずはミキサーのボリュームフェーダーの癖を見つけること。どの目盛から音が上がったり下がったり始めるのか。それが分かったら、ゲインを使いながらその癖を修正します。簡単そうに思えるのですが、実際に意識して練習してみるとこれが奥深い。DJたるもの基本中の基本じゃーとお叱りを受けそうですが。。それはともかく、まずこの点をマスターすれば、繋ぐ曲も幅広いジャンルに適應でき、今まで合いそうもないな~と思っていた曲が意外にもマッチするので、新しい発見や冒険ができます。

ネクストステップとして、プレイ全体の流れや会場の雰囲気に合わせてボリュームコントロールができるようになれば、劇的に音の聞こえ方が変わり、独特のグルーブが作り出せます。プロのDJプレイをそういう観点で見たり聞いたりしてみると、物凄く気を使っていることが分かるので勉強になります。

ボリュームコントロールは何もDJ界だけに必要なことではありません。先日、「無音盆踊り」というお祭りに関する興味深い記事をネットで読みました。愛知県東海市で行われているそうなのですが、FM電波で半径100メートルほどの範囲に音を飛ばし、踊り手がイヤホンのついた携帯ラジオでそれを聴きながら盆踊りをするそうです。輪になった踊り手が、無音で踊る様はなかなか不気味ですが、周囲への騒音対策として導入されたそうです。

盆踊りが「騒音」扱いとは悲しい世の中になったものだと思ってしまいますが、この件についてもボリュームコントロールの観点からみると無理もない話だなと思います。つまり音量が会場の大さに見合っていないなかったり、曲調があまりにも雰囲気合ったものでなかったりしていたのではないのでしょうか。

この夏、近所のお祭りに行きましたが、そこでも大きく出そうとして音の割れたAKB48が繰り返された時は、正直心地よい気持ちにはなれませんでした。こういってことから見えてくるように、シンプルなのにとっても重要なボリュームコントロール。音の上げ下げだけでここまで音楽の聞こえ方が変わるものだと実感しています。これを読んでいる方たちが、より音楽を楽しめるように、そして楽しませることができるようになるきっかけの一つになればと思います。Collective11周年存分に楽しみください。

旧本探訪 ‘itaru wakui’

野田努編『クラブ・ミュージックの文化誌——ハウス誕生からレイヴ・カルチャーまで』JICC出版局、1993年

まず目次を紹介しよう。

SECOND SUMMER OF LOVE: 1988年、その最初の事件は起こった
レイヴ・カルチャーへ——DANCE UNDERGROUND! (三田格)
ACID CULTURE: アシッドとコンピュータが奏でたニュー・サイケデリックス
パイオ・フィードバック・サウンド (阿木謙)
BALEARIC BEAT: 地中海に浮かぶディスコ・アイランドが意味したもの
イビサから持ち帰ったオープン・マインド (平田知昌)
HOUSE MUSIC: 従来のダンス・ミュージックを凌駕したサウンド実験
ハウス・サウンドの誕生と展開 (小泉雅史)
TECHNO: モータータウンにかき立てられた若きビート
1987年のデトロイトをめぐって (野田努)
GROUND BEAT: ジャマイカ移民の子孫が成しえた対抗文化
もうひとつのイギリス“UKブラッグ” (水越真紀)
ACID JAZZ: ストリート・ブラッグ・ミュージックの新たな成熟
ジャズ、ストリートへの復権 (桂開津広)
ROCK WITH DANCE: ダンス・ブームはロックに何をもたらしたか
マッドチエスターの暑くて長い夏 (久保憲司)
FASHION DESIGN: ニュー・ロマンティクスからスケーターまで
ロンドン・クラブ・ファッションの変遷 (長澤均)

まず、と出だしに書いたが、目次が本書のすべてを表現している。だから各章の紹介は省く。ただし、1993年の日本でクラブ・ミュージックの世界的動向をこれだけ網羅的に扱った本書は画期的だといえるだろう。というよりもむしろ、クラブ・ミュージックを紹介し批評することへの熱い思いがあったからこそ、この本は生まれたのだろう。ちなみに JICC 出版局とはいまの宝島社のこと。執筆者の選択について「あとがき」で野田努は、「普段バラバラにそれぞれ違うメディアで執筆している諸氏をネットワーク化したい、ということ、それぞれのテーマに情熱をもって精通している」ことが条件だったという。であればこそ、その「情熱」がそれぞれの書き手の文章ににじみ出ているのではないかと。

書き手の顔ぶれをみて、「それぞれ違うメディアで執筆している」という印象は持たない。わたしたちはこの本の後に『ele-king』をはじめとするクラブ・ミュージックについての雑誌がたくさん生まれたことを知っているからだ。つまりそれは「情熱をもって精通した」人たちの「ネットワーク」がうまくいったことをあらわす。そして、まだインターネットが弱小だった当時、そういった雑誌に載ったレビューやインタビューから、いま collective で共有しているような音楽について知っていったという人は、わたしだけではないはずだ。ともあれ本書は、クラブ・ミュージック受容の黎明期——それは同時にクラブ・ミュージックの誕生期でもあった——に編まれたドキュメントとして、貴重な歴史をいまのわたしたちに教えてくれる。

